OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	状態の移行前を表す「もう/まだ」について
Author(s)	池田, 英喜
Citation	阪大日本語研究. 2000, 12, p. 49-56
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11080
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大日本語研究』12（2000）

状態の移行[1]前を表す「もう／まだ」について

"*mou*" and "*mada*", Expressing Time Before the Shift of States

池田　英喜
IKEDA Hideki

キーワード：状態の移行、状態継続の打ち切り

【要旨】

「彼はもう来る」には「来ていない／来るのを待っている」といった継続している状態の打ち切りというニュアンスがあるが、「彼は来る」にはそのようなニュアンスはない。また、「水がもう少し必要だ」は言えるが、「水がもう必要だ」は特殊な状況を設定しないと言えない。これはいずれも「もう」が状態継続の打ち切りという意味を付加するためであり、動作性述語文の前者では状態継続の打ち切りのための手段が述語によって表され、状態性述語文の後者では述語による手段の明示の代わりに状態継続の打ち切りまでの必要量があらわされており、これは必須となっている。一方「まだ」は状態継続の維持を表すだけなので、動作性述語であれ、状態性述語であれ、「もう」に見られるような制約はない。

1．はじめに

以下の例(1)〜(8)において、(1)(3)(5)(7)が真であれば、(2)(4)(6)(8)は偽であるし、その逆もまた同様である。

(1)もう大丈夫だ。
(2)まだ大丈夫ではない。
(3)まだ大丈夫だ。
(4)もう大丈夫ではない。
(5)もうあきらめた/あきらめている。
(6)まだあきらめていない。
(7)まだあきらめている。
(8)もうあきらめていない。

これは「もう/まだ」は述語の肯否の形式も巻き込んで、発話時が状態の移行後にあるか、移行前にあるかで対立し、対立する2つの状態が相補的に分布していることを示している。「もう」は状態の移行以後を「まだ」は状態の移行以前を表している[2]。

一方で以下の(9)(10)の例のように「もう／まだ」が、ともに状態の移行以前を表す場合があり、この場合「もう/まだ」は相補分布的な対立を示さない。「もう少し足りない」が真であり、かつ「まだ少し足りない」が真であることもありえる。

(9)水がもう少し足りない[3]。
(10)水がまだ少し足りない。

この場合、(10)の「まだ」は「水が足りていない」状態から「水が足りている」状態への移行以前であることを表しているというのは問題ないので、(9)の「もう」について考察することが必要になる。よって本稿では、特に状態の移行以前を表す「もう」について考察を進める。

2．状態の移行前にある「もう」

2．1　動作性述語の場合

「もう」が動作性述語のル形と共起する場合は、発話時は単一事象の開始限界以前[4]にある（池田(1999)）。

(11)あいつはもう死ぬ。
(12)僕はもう寝る。

(11)(12)はいずれの場合も発話時は「死ぬ」「寝る」という事象の開始前であり、(11)は(13)、(12)は(14)のように意味を変えずに語を追加することができるが、このカッコの中こそが「もう」によって付加される意味と考えられる。

(13)あいつはもう（すぐ／じき）死ぬ。
(14)僕はもう（今から／これから）寝る。

命令、勧誘を表す語と共起する場合も、当然事象の開始限界以前という状況で「もう」が用いられる。その場合「もう」によってカッコの中のような情報が付加されることになる。

⑮もう（これ以上ここにいないで）帰れ。
⑯もう（それ以上）しゃべるな。
⑰もう（これ以上）あんなことはやめよう。

いずれにせよ、「もう」を用いることによって今まで続いていた状態をいったん終えること、そして、それが時間的にも近いことをあらわしている。例えば⑬⑭では、単に「死ぬ／寝る」といったのではそれまで「生きていた／起きていた」ことに対して特に示唆するものはないが、「もう死ぬ／もう寝る」と言った時には、「今まで生きていたのをやめて／今まで起きていたのをやめて」というニュアンスが加わる。そして、その状態継続を打ち切る手段が述語の動詞によって示されている。だからこそ⑮〜⑰の命令や勧誘の例では、「これ以上」といった意味を付加することになるのである。

一方、「まだ」が動作性述語のル形の否定形と共起する場合も、発話時は単一事象の開始限界以前にあると述べたが、これらも「もう」の場合と同じように意味を変えずに語を追加することができる[5]。

⑱あいつは（まだ／まだしばらく）死なない。
⑲僕は（まだ／まだしばらく）寝ない。

「もう」とは逆に、今まで継続している状態をそのまま終わることなく維持して、という意味を付加している。

2．2　状態性述語の場合

「もう」が状態性述語と共起しながら、状態の移行以後を表さない場合の例として以下のようなものがある。

⑳水がもう少し足りない。
㉑完成までもう一、二年時間がかかる。
㉒人材をもう何人か増やしたい。

この場合は、前節動作性述語の場合とは逆に「少し／一、二年／何人か」といった語を削除すると、文の意味がはっきりしなくなる。

㉓？水がもう足りない。
㉔？完成までもう時間がかかる。
㉕？人材をもう増やしたい。

同じような場合でも「まだ」の場合には問題はない。

㉖水が（まだ少し／まだ）足りない。
㉗完成まで（まだ一、二年／まだ）時間がかかる。
㉘人材を（まだ何人か／まだ）増やしたい。

前節で見た動詞述語の場合の例では、「もう」は状態継続の打ち切りの意味を付加し、「まだ」は状態継続の維持という意味を付加していた。特に「もう」の場合は状態継続を打ち切るための手段が述語によって示されていた。ところが状態性述語文の場合には打ち切りの手段が、当然のことながら述語で示されてはいない。そこで手段を示す代わりに打ち切りまでの数や量が示されると考えてはどうか。よって、それは手段の代わりとして必須の項目でなので、省略することができないのである。「まだ」の場合には状態継続の維持を示すだけなので、数や量を表す語は単なる追加情報に過ぎず、よって必須とはならない。

また、以下の㉙～㉛のように「もう＋数量を表す語」を述語にして文を書き換えることが可能であることからも両者の結びつきが強いことがうかがえる。

㉙足りないのは、もう少しだ。
㉚かかるのは、もう一、二年（の時間）だ。
㉛増やしたいのは、もう何人かだ。

3．「もう」と共起する数量を表す語

状態性述語の場合は「もう」には必ず数量を表す語をともなう必要があった。前述の例を再掲する。

㉜水がもう少し足りない。
㉝完成までもう一、二年時間がかかる。
㉞人材をもう何人か増やしたい。

上の例はそれぞれ発話時において「水が足りない」「完成まで時間がかかる」「人材を増やしたい」ことを示し、「水の不足量」「完成までの時間量」「増やしたい人材の数」がそれぞれ「少し／一、二年／何人か」であることを表している。これはどういった数量であるかを考えてみたい。「少し／一、二年／何人か」を「ちょっと／わずかに／たくさん／ずいぶん／かなり」に置き換えたのが以下の㉟〜㊲である。「もう」をともなわなければいずれも問題はないのだが、実際は「少し／ちょっと／わずかに」といった少数少量を表す語としか共起しない。

㉟水がもう（少し／ちょっと／わずかに／*たくさん／*ずいぶん／*かなり）足りない。
㊱完成までもう（少し／ちょっと／わずかに／*たくさん／*ずいぶん／*かなり）時間がかかる。
㊲人材をもう（少し／ちょっと／わずかに／*たくさん／*ずいぶん／*かなり）増やしたい。

これは先ほど見た動作性述語の場合も同様であった。

㊳あいつはもう（すぐ／じき）死ぬ。
㊴僕はもう（今から／これから）寝る。

「すぐ／じき／いまから／これから」はいずれも「間もなく」という意味を持ち、時間量としては少量である。

一方以下の㊵〜㊷の例はいずれも「もう」は普通出現しない（できない）ことから、「もう」は数量を表す語をともなってしか状態性述語文には出現しない（できない）と考えられる。

㊵？水がもう足りない。
㊶？完成までもう時間がかかる。
㊷？人材をもう増やしたい。

「まだ」にはそのような制限がないのは以下の㊸〜㊽の例が示す通りである。ちなみに㊸〜㊽は「今までも水が足りなくて、依然として水が足りない状態が継続していること」「完成まで時間がかかるという状況が以前から継続していること」「人材を増やす活動を継続したいこと」をそれぞれ表している。

㊸水がまだ（少し／ちょっと／わずかに／たくさん／ずいぶん／かなり）足りない。

(44)完成までまだ（少し／ちょっと／わずかに／たくさん／ずいぶん／かなり）時間がかかる。
(45)人材をまだ（少し／ちょっと／わずかに／たくさん／ずいぶん／かなり）増やしたい。
(46)水がまだ足りない。
(47)完成までまだ時間がかかる。
(48)人材をまだ増やしたい。

結論として「もう」はある種の小さい数量を表す語との結びつきが強いのに対して、「まだ」は数量を表す語とは結びつかず、述語との結びつきが強いことを示していると言えよう。言い方を変えると、たとえば「水がまだ少し足りない」は「水がまだ足りない」と「水が少し足りない」の足し算の結果として産出されると考えられるが、「水がもう少し足りない」は「水がもう足りない」と「水が少し足りない」の足し算の結果として産出されるのではないということである。

今、数や量を表す語と共起したとき「もう」はその数や量との結びつきをより強くし、それを修飾するが、「まだ」は数や量とは結びつかず、あくまで述語との関係を保ち、既存の状態が継続中であることを表すと仮定する。

次に示すような例はその仮定を保持していよう。

(49)水がまだもう少し足りない。
=「水がまだ足りない」＋「水がもう少し足りない」

しかし「まだ」と「もう」を入れ替えた次の文はない。

(50)＊水がもうまだ少し足りない。
=「水がもう足りない」＋（「水がまだ足りない」＋「水が少し足りない」）

(49)は「水がまだ足りない」は「今までから水が足りなくて、その状態が現在も継続中である」ことを表し、「水がもう少し足りない」は単に足りない水の量を示しているだけなので、「今までから水が足りなくて今もなお水が足りないのだが、その不足量はわずかである」という意味解釈が容易にできるのである。しかし(50)では、「水がもう足りない」の「もう」がここでは数や量の表現と共起していないので、状態の移行後であることを表している。つまり、「今まで足りていた水が足りなくなった」ことを表していることになるのだが、その一方で、「水がまだ足りない」は「今までから水が足りなくて、その状態が現在も継続中である」ことを表すの

で、「今まで足りていた水が足りなくなった」という意味とは相容れない。よって、「水がもうまだ少し足りない」は意味解釈不可能となるのである。

4．まとめ

状態性述語の場合と動作性述語の場合で一見まったく別の「もう」が存在するかのように見えるが、今まで継続していた状態をいったん打ち切るという意味を「もう」が担っていると考えれば統一的な説明を与えることができる。

つまり、動作性述語文に出現する「もう」の場合には状態継続を打ち切る手段が、述語の動詞によって表されているので、「もう」の後に数量を表す語を特に必要としない。実際は意味的に少量を表す語が来ることが多いが、それは必須ではない。一方状態性述語文に出現する「もう」の場合には状態継続を打ち切る手段を述語で表すことは当然できない。だからその代わりに状態継続打ち切りまでの量を表す語が「もう」に伴って必ず現れる。数量を表す語は「もう」を使う際には必須となる。

(51)論文の完成までもう1週間かかる。
(52)もう（そろそろ／すぐ／じき）新潟は一面の銀世界だ。
(53)もう（φ／そろそろ／すぐ／じき）電車が来る。
(54)リュウ坊、もうおばあちゃん死ぬよ、あの世のできものができてしもうた、もうおばあちゃん死ぬよ。（「限りなく透明に近いブルー」村上　龍）（下線の破線は池田）

1）例えば「コーヒーを飲む」という事象を考えたとき、誰かが実際に「飲む」という行動を起こす前はその人は「コーヒーを飲んでいない」状態にあり、行動を起こしていれば、「コーヒーを飲んでいる」状態にあることになる。このようにある状態が真であれば、それと対立するもうひとつの状態が偽であるというような関係をもつ2つの状態が設定できるとき、一方の状態から他方の状態へと変化することを「状態の移行」と呼ぶ。これは「花が美しい」という静的な事象を考えたときにも当てはまる概念で、「まだ花が美しい」といえば「美しい」から「美しくない」への状態の移行が起こる前を表していることになる。詳しくは池田（1999）参照のこと。
2）池田（1999）参照
3）「水がもう、少し足りない」という風に、「もう」と「少し」の間にポーズを置いた場合には、今まで十分に足りていた水が減ったことによって、「足りない」という状態になったことを表す。よって本稿での考察対象とはしない。
4）単一事象開始限界以前とは要するに、ある事象が始まっていない状態から始まっている状態への移行

以前にあるということ。

5）同じように見た目は動作性述語のル形の否定でも、意味的にテイル形の否定に置き換えられる場合もある。次の「まだ」の場合は「来ない/死なない」をそれぞれ「来ていない/死んでいない」にパラフレーズが可能なので、状態性述語文と見なしてもよい。本稿では状態移行以前を表す場合のみを考察するので考察対象には含めない。

・花屋の軒の男の待ち人はまだ来ない。(「ありふれた愛に関する調査」荒井晴彦)

・じつはわたしはときどき深夜の寝床を蹴って立ち上がり、突然「死のう」とさけぶことがあり、それを聞きつけた文蔵に「まだ死なないのか」とひやかされる始末であるが、(「普賢」石川　淳)

【参考文献】

池田　英喜(1999)「「もう」と「まだ」-状態の移行を前提とする2つの副詞-」『阪大日本語研究』11　大阪大学文学部日本語学講座

森田　良行(1980)『基礎日本語2』角川書店

いけだ　ひでき（新潟大学留学生センター助教授）